

## 米山担当委員会アワー

### ●米山記念奨学生 王 宵様

「米山記念奨学会の奨学生となった私と日本留学の成果」



私は中国の寧夏回族自治区の銀川市で生まれ育ちました。中国の重慶大学を卒業後、2016 年来日し、神戸芸術工科大学で修士課程に進学しました。現在、同大学の芸術工科学研究科に所属し、博士後期課程で建築分野の視点から団地における市民活動の研究を行っています。

ロータリー米山記念奨学会の奨学生に選ばれてほんとに光栄だと思っています。おそらく奨学生の皆さんは奨学生になることがきっかけで、アルバイトを減らし、自分の研究を集中することが多いと思いますが、私にとって、非常に大きな影響を与えることになりました。自らのアルバイト収入で生活費を賄いたいと思いますので、学業が忙しいにも関わらず、週 4 回に通勤 2 時間のアルバイトに行かなければならない本末転倒な学生生活でした。そして、私は団地での再生に向けた社会貢献活動に関心を持っているので、なるべく毎週ボランティア活動に参加したかったが、結局 1 ヶ月 1~2 回程度しかできませんでした。

ところが、私は米山記念奨学会の奨学生になって、确实アルバイトの回数が減った一方、研究に専念することができて、更に現在、団地で 2 つのボランティア活動に参加することになりました。コロナ禍の影響で、二回しか参加できなかったが、沢山の素敵な方々に出会えて、スピーチを聞かせていただいたことが非常に充実しています。

現在、ロータリー米山記念奨学会の奨学生になって 1 年半に立ちました。昨年はコロナの影響で奨学生のセミナーとロータリークラブの例会が半分程度オンラインで行われていましたが、2022 年 4 月からようやく対面の形式となって、定期的にロータリークラブの例会に参加しながら、奨学生の交流会やセミナーも全て参加できました。クラブ例会で様々な会員からの卓話を拝聴し、非常に見聞を広めました。そして、奨学生セミナーでの学友、他のクラブの奨学生との交流ができて、とても有意義な時間を過ごしました。

では、私は何故日本へ留学したいと言うと、団地に関して研究したいものです。もちろん、私の実家は大きな団地の中にある。団地の中で幼稚園、小学校、中学校、高校生活を過ごしていた。大学卒業後、就職のために地元に戻りました。団地は老朽化によって建物の建替えなどが進んでいた一方、子どもの頃遊んでいた公園では遊具施設が全て撤去され、高齢者のツグゲットボールなどの場になっていました。団地の中に高齢者の姿が圧倒的に多く、以前のような団地の活力が全く感じられないことに始めて気がつきました。

中国では、「一人っ子」から「二人っ子」へと政策を転換したものの、予想を超えるスピードで少子高齢化が進んでいます。中国の都市部の住宅は基本的に小団地であり、築 30 年以上の団地が多く、建築自体の老朽化に加え、地域のコミュニティ活力が低下し、再生の必要があると考えられています。私は大学の授業で、日本では戦後経済成長期に建てられた住宅団地に対して、様々な団地再生の活動が行われ、高く評価されていることを知っていたため、やはり日本で団地再生に関する研究手法や研究思考を学びながら、実践的な知識を身につけたいと思い、日本への留学を決意しました。

日本の団地再生は、建て替えやリノベーションによるハード面の再生が行われています。それに加え、コミュニティ活性化を目指した住民主導の活動が行われているソフト面の再生があります。そこで私の

修士研究は身近なソフト面の再生に焦点を当て、兵庫県明舞団地における再生に向けた住民が主体となる市民活動を対象にして調査しました。2003年から、兵庫県は明舞団地をモデル地区として、団地再生に向けた様々な取り組みを行っていました。しかし、私は、その実態を調査すると、公的助成金を原資として、市民活動を持続させることは比較的容易ですが、助成金事業が終了すると、活動を存続させることが容易ではないという事実が明らかになりました。

そうした中、「NPO ひまわり会」という高齢者向けの食堂・配食活動は、公的助成金受給終了後も自立した活動として存続していることが明らかになりました。元気な高齢者を中心として、19年間も活動を続けています。その継続の要因を解明するため、私は実際に活動に参加し、詳しく調査を行い、活動の継続性を考察しました。「ひまわり会」は、社会的に孤立している高齢者の食生活を支援し、地域のニーズを把握した上で定期的に多世代が交流できる活動を開催し、食を通じて、地域の課題に応じています。そして、スタッフの意見や意欲を尊重しながら、働きやすい職場環境を提供するとともに、活動収入の一部を謝礼金として支給することにより、働くことへの意欲と結束力を高めています。地域住民ばかりではなく、スタッフの要望にも応えることで、活動を長期間持続させており、団地再生の事例として高く評価できるものと考えられます。これから、「ひまわり会」を参考にし、明舞団地における多く継続できる活動が成り立ち、さらに他の団地再生でも地域に役に立つ活動ができることを期待することができると考えられます。

そして、博士課程では修士研究の結果を基礎に、日本全国の団地における食をテーマに活動している団体を対象に捉え、研究対象の全てにおいてヒアリング調査を実施し、参与観察によるそれぞれの活動の実態を網羅的に把握したいと思います。また、好事例だけではなく、中止および運営困難となった活動と共に活動の形成要素および中止となる原因を分析し、継続可能な市民活動の要因を明らかにすることで、これからの団地再生に向けた住民主導の長期に継続できる活動を促す方策について提言したいと考えます。

博士課程の研究を通じて社会に貢献するために必要な能力を養い、研究手法や研究思考を学びながら、将来、中国の現状を踏まえ、日本での研究を生かした提案とこれからの可能性について中国で実現していきたいと考えています



中国団地のイメージ



NPO ひまわり日常の活動様子